努力家と天才の茨道 ～Season2

椿姫

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

氷川紗夜への告白が成功し、正式に交際を始めることになった華宮和都（はなみやわと）。

彼は華宮家の一人息子でありお金持ち、幼少期からの英才教育によりなんでも出来る言わば完璧人間。そして、ガールズバンドＲｏｓｅｌｉａの湊友希那、今井リサと幼馴染である。

幼馴染に振り回されたり、紗夜とイチャついたりＲｏｓｅｌｉａメンバーや他のみんなも巻き込んで今日も今日とて和都の周りはドッタンバッタン大騒ぎ！そんな中でも成長して行く物語です。

※前作「努力家と天才の茨道～歌姫を添えて」の続編となっています。

目次

Episode01 新たな始まり ―――― 1
Episode02 恋愛相談 ―――― 8
Episode03 氷川紗夜、初めてのクッキー作り ―――― 14
Episode04 プロデューサー・チュチュ ―――― 23
Episode05 にゃんにゃんな休日 ―――― 30
Episode06 BRAVEJEWELとdubとチュチュ

Ｅｐｉｓｏｄｅ０１　新たな始まり

～華宮邸～

「……よし。行ってくる」

「いってらっしゃいませ、坊っちゃま」

　通っている羽丘の制服に着替えて爺や使用人の人達に見送られながら家の門を出る。いつもならこのまま真っ直ぐ学校に向かうが今日からはいつもじゃない。俺は鼻歌混じりに待ち合わせ場所に向かっていく。

「ちょっと早く来すぎたかな…」

　短く切った髪を触りながら身だしなみを確認する。前までは長くしてた髪をポニテにしたりしてたけど思い切って短髪にした訳だが…

「…変じゃねぇよな？」

「和都」

　髪を気にしてると不意に声を掛けられる。振り向くとそこに居たのは羽丘とは違う花咲川の制服を身に纏い、長く綺麗な青緑の髪を靡かせている女子高生いや、女性と言うべきだ。そしてこの度交際をする事になった俺の彼女でもある。

「遅くなってすみません。約束の時間はすぎてないかしら？」

「ん？だいじょぶ俺も今来たとこだから」

「それなら良かったです」

「じゃあ、行こうぜ？紗夜」

　俺はそう言って紗夜の前に手を差し伸べる。

「…和都？」

「いや、その…手、繋いでみようかって紗夜が前言ってたからそれを実行しようとしてるだけで…」

　目を逸らし照れながらも紗夜にそう言うと紗夜は恥ずかしがりながら俺の手を取る。

「じ、自分で言っておきながら言うのもなんだけど恥ずかしい…」

「なんで紗夜が俺より照れるんだよ…手差し伸べてた俺の方が恥ずかしいってーの」
　紗夜の綺麗な手を優しく握る。こ、これが女子の手…すっげー柔らかい。
「わ、和都…さっきから私の手をじっと見てるのだけど…」
「へぇっ!?いやっ…紗夜の手が綺麗だったからつい…」
「す、少しは私の顔も見て欲しい……です。そうじゃないと和都が手フェチにみえるので」
「ぶふっ!?」
　紗夜の唐突の発言に思わず吹き出す。
「はっ!?お、俺が手フェチだと!?誰がそんなこと言ってた!?」
「ちょっと声大きいです…」
「わ、悪ぃ…」
　声のボリュームを落とし、改めて紗夜に話し掛ける。
「なんで俺が手フェチってことになってる?」
「今井さんが言ってました。『練習してる時とか手伝いを頼んだ時ってよく手を見られたりするんだよねー♪もしかしたら手フェチかも♪』って」
「リサあの野郎…余計な事吹き込みやがって…」
「それで、和都は手フェチなんですか?」
　本題に入ってきた紗夜に俺はハッキリ断言する。
「俺は手フェチじゃねぇよ…見蕩れてただけだって」
「見蕩れ…そ、そう言ってくれると嬉しいです」
　ったくリサ、幾ら幼馴染でも言っていい事悪いことぐらいわかってるだろーが。まぁそれは友希那にも言えた事なんだが猫が絡むと友希那は喋り方が軟化してポンコツになるからなんとも言えん。
　…おっと、初めての読者諸君にわかりやすく説明すると俺と友希那とリサは1歳違いの幼馴染だ、同じ羽丘学園に通っていてガールズバンド「Ｒｏｓｅｌｉａ」を結成してる。紗夜も属していて担当はギター。友希那はボーカル、リサはベースだ。他にも、紗夜と同じ花咲川に通っている燐子さんはキーボードを、ドラムは燐子さんと仲がい

いメンバー最年少中学3年のあこ。
　誰も彼もがトップクラスの腕を兼ね備えていてＲｏｓｅｌｉａでしか奏でられない最高の音楽を求めていく。俺は半ば強引に連れられて（主に友希那）だがＲｏｓｅｌｉａの練習を見てアドバイスをしたり、俺の楽器を使って演奏してイメトレさせられたりとやる事は様々。別に嫌だってわけじゃないしこれで紗夜や友希那達が成長できるならまぁ、それでいいって思ってる。
　そして俺はそのＲｏｓｅｌｉａメンバーの紗夜へ告白し、正式に交際をすることとなったのだ。友希那達からは、「おめでとう」とか感謝の言葉を貰えて凄く嬉しかった。めっちゃ恥ずかしかったけども。紗夜と二人で歩いていくうちに分かれ道に辿り着いた。
「あ……私はこっちなので」
「え？あ、そうだな…」
　紗夜も俺も名残惜しそうに握っていた手を離す。ここから登校先は別々になっているから仕方がないと言えば仕方ないがやはりお互いにまだ手の感触を感じていたかった。
「では…また後で」
「お、おう…」
　そう言って紗夜は花咲川の方へ歩いていった。歩いていく紗夜の後ろ姿を見てから俺も羽丘の方に向けて歩きを進めた。
「……まだ、紗夜の手の感触残ってる…」
　初めて待ち合わせをして途中まで登校してみたわけだが…正直めっちゃ恥ずかしかった。だって紗夜めっちゃ指絡めてきてんだぞ!?おお、落ち着け俺！
「ふぅ…ふぅ…落ち着いｔ」
「ワ～トっ！何そんなに朝から息切らしてんの～♪」
「おうわっ!?」
　言葉を遮るように俺の背中が勢いよく押される。こんなふうに朝からちょっかいを掛けてくる人は幼馴染以外にいない、と言うかそういう事するのは1人だけと決まっている。
「痛てて…朝っぱらからいきなり何すんだよリサ！」

「おっはよ～ワト☆朝から紗夜とらぶらぶだったね～♪いいねいいね青春してるねぇ♪」
　ちょっかいを出してきたのは幼馴染の今井リサだ。同じ羽丘に通っていて上記で説明した通り、Ｒｏｓｅｌｉａのベース担当。見た目がギャルっぽいが実はめちゃくちゃ面倒みが良くて菓子作りにも長けている。クラスの男子曰く『リサさんはコミュ力のガチ勢』との事。
「…リサ、私眠いからあまり大きな声で話さないで欲しいのだけど…」
「ごめん友希那～また新しい曲作り？」
「ええ、そうよ」
　欠伸をしながらリサに注意をしているのがもう１人の幼馴染。湊友希那、Ｒｏｓｅｌｉａのリーダーだ。
「まーた新曲に手こずってたのかお前は？」
「ええ…お陰様で眠すぎるわ」
「あんま無茶しねー方がいいんじゃね？」
「ライブが迫ってるからそうとも言えないのよ」
　友希那はそう言いながら眠たそうな目を開けようとしてる。
「友希那、せっかくワトが心配してくれてるんだからさ～♪素直になった方がいいんじゃい？学校終わったらカフェ行こ、ね？」
「で、でも曲とバンドの練習も…」
　友希那はリサからのカフェの誘いに少し戸惑う。
「たまにはいーんじゃね？少しくらいリラックスしとけや。身体ぶっ壊すしてからじゃ遅いんだからよ」
「和都とリサがそう言うなら…」
　友希那は渋々ながらもリサとのカフェを承諾する。
「友希那とカフェ楽しみだな～♪それはそれとして…ふふふ、ワト～♪」
「な、なんだよ…」
「さっき紗夜と手繋いで歩いてたでしょ～♪」
「ぶふぉあっ!?」
　リサの爆弾発言に思わず俺は吹き出す。見られていたのが恥ずか

しい。と、言うか…
「いつから見てたんだよっ!?」
「紗夜と待ち合わせしてた時から後ろにいたよ～友希那も一緒にね☆」
「はぁぁっ!?リサお前ナズェミデルンディス!!」
だいぶ見られていたと思うと恥ずかしくなり舌を噛んだ。めっちゃ痛い。
「わ、ワト大丈夫…?今めっちゃ舌噛まなかった?」
「し、舌超痛てぇ…」
苦痛に耐えながらも俺は学校へと向かった。

紗夜ｓｉｄｅ

(和都の手の感触がまだある…あたたかい)
先程まで手を繋いでいた自分の手をきゅっと握りしめる。
(初めて待ち合わせをしてみたけれど…これが恋人同士って事なのね…)
思わず私は和都に告白された日のことを思い出す。まさか両想いでしかも本当に付き合うことになるとは思ってもなかった。しかも帰り際に私からキスまでしてしまうなんて…しかも帰ってから日菜に和都と交際することを話したら喜びなのか悲しいのかよく分からない感じになってたわ。あんな日菜を見たのは初めてかもね…
(今思い出すと私がした事って…ず、随分と大胆だったような気がしますね／／／／／)
誰かを好きになるなんて当時の私には無いと思っていたけど何が起きるか分からないわね。異性と付き合うことに関してまだ知らない事が多いけど和都となら…とても充実したひと時を過ごせる、そんなことを思いながら私は学校に向かっていった。
学校に着いてからは自分のクラスに行き、ギターや道具を置いて風紀員の仕事に向かう。今日は整容点検があるから和都に頼んで待ち合わせ時間を僅かに早めてもらった。初めての待ち合わせがこんな

感じでいいのかと私は言ったけど和都は
『俺は全然構わねぇよ。どういう形であれ紗夜と一緒に入れるならな』
って言ってくれたので安心しました。点検を終えてからは自分のクラスに戻りホームルームを終えて授業に取り組む。もう時期試験もあるので気を引き締め無ければいけないし、同時期にＳＰＡＣＥでの新曲披露ＬＩＶＥも迫ってきている。
（和都の事で浮かれすぎるわけにもいかないし勉強もバンドも両立できるようにしっかりしなきゃ…）
委員会の仕事や日直用ノートを先生に提出したりするとあっという間に放課後になった。練習の為にギターを背負って教室を出て行こうとすると白金さんに呼び止められる。
「ひ、氷川さん…」
「白金さん、どうしました？」
「その…友希那さんからなんですけど『今日の練習は休みだから各自での練習を』だそうです」
「そうですか。わざわざありがとうございます」
私は白金さんのお礼を言って教室を出て行く。練習が無くなりそのまま家に帰って今日はギターの練習をしようかと思いながら帰路を歩いていたその時、和都からＬＩＮ●が届く。内容は『恋人同士になって初めてのデートはどこにする？』と、いうものだった。唐突の話題に足を止めて私は赤面してしまう。
「は、初デート……」
どこがいいか？と聞かれてもそういう事を殆ど知らないからなんて言ったらいいか分からない私は『ちょっと待ってください』と一言返信して家に入った。そのまま階段を駆け上がり自分の部屋に入るや否、ギターを置いてベッドにダイブする。
（デートとかを体験したことのある人に相談するのが１番ですよね？…だったら思い当たるのは…）
私はある人に相談にのってもらうために電話を掛けた。
「あ、もしもし…はい。氷川紗夜です、ちょっと相談したいことがある

んですけど…今時間空いてますか？」

Ｅｐｉｓｏｄｅ０２　恋愛相談

紗夜ｓｉｄｅ

私は電話である人とファミレスで待ち合わせている。
「そろそろ来る頃かしらね…」
そう言いながら注文していたフライドポテトに手を伸ばし口に含む。不躾にお願いしていまい迷惑ではないだろうかと思いながら待つこと数分…
「えっと…紗夜さん」
不意に声を掛けられた振り向くとそこには約束していた人が立っていた。一般男子よりも少しだけ長い青髪に翡翠色の目、後ろ髪は長いから一本に束ねて横に降ろしている。顔だけ見れば女の子に間違えられかねないが彼は実質男だ。
「いきなり呼び出してしまってすいません、滝河さん」
「いやぁ…紗夜さんに『相談したいことがあります』って言われるのは珍しかったので。と言うよりも今日はひまりもバイトで忙しいと言うので実質時間も空いてましたから問題ありませんよ」
滝河さんはそう言って私の前に座り荷物を置いた。この人は誰だと分からない読者様のために説明させていただきます。
滝河さんこと滝河雄天さんは日菜の通っている羽丘学園の２年生でガールズロックバンドＡｆｔｅｒｇｌｏｗのメンバーと幼馴染であり、そのメンバーの上原ひまりさんとお付き合いしてる人です。
「えっと紗夜さん、僕が呼ばれた理由はＬＩＮＥで見ましたけど…和都との恋人になってからの初デートの内容について相談したいことがありますって…」
「あ、はい…」
私は自分なりに考えた和都とのデートプランを滝河さんに説明する。
「…と、言う事なんですけども。ど、どうでしょうか？」
「まぁ今のを聞いて紗夜さんが大体どう言ったことを和都としたい

かってのは分かりましたよ」
　そう言って滝河さんはノートに私から聞いた話やデートプランを纏めている。
「流石滝河さんですね。上原さんと出かける際にもそんな風に考えてたりノートを使ったりしてるんですか？」
　私はふと思った事を滝河さんに投げかけてみた。すると意外な答えが帰ってきた。
「え？僕がひまりと出掛ける時にこんなことするのか、ですか？いやいや、そんな事しませんよ？」
「そ、そうなんですか？」
　意外な答えで私はびっくりしてしまう。てっきり予定とかを組み立てているのかと思ってましたけど…違うんですかね？
「デートとかする時は確かに予定を立てたりするのはすごく大事なことですし紗夜さんの意見や考えは的を射抜いてます。でも、予定外の事とかまで考えてたらいくらなんでもキリないですよ？」
「で、でもそういうのって大事なのでは…？」
「まぁ、そうですけども…僕とひまりの場合が特別なのかもって感じはしますね…」
　滝河さんは頬をぽりぽりと掻きながらため息をつく。
「ひまりと出掛ける時なんですけど、最初はどこ行くか決めてそっからはひまりが行きたいって言ってたところにいってそれからは何も無いですよ」
「滝河さん的に、上原さんにデートとかの事は任せっきりでいいんですか？」
「…任せっきりって言うよりも、ひまりが幸せそうならそれでいいんです。笑ってるひまりを見るのが好きなんですよ、僕」
「そう…ですか」
　そう言う滝河さんはどこか幸せそうな顔をしてました。それから色々アドバイス等をしてもらい支払いを終えて店を出る。
「今日はわざわざありがとうございます滝河さん。私なりに考えてみたいと思います。では…」

「っあ！すいません紗夜さん」
「どうしました？」
帰ろうとすると滝河さんに呼び止められる。
「もしよかったら、これを…」
そう言って滝河さんが差し出したのは商店街に貼ってあるようなチラシだった。そのチラシには『羽沢珈琲店主催♪お菓子作り教室♪』と描かれていた。
「お菓子作り教室…？」
「はい。今度の土曜日につぐみの家でお菓子作り教室を開くって事になってそれでチラシ配ったりするのを手伝ったりしてるんです。初心者経験者問わず歓迎ですし調理道具はつぐみの家から全部レンタルする形になるので持ってくるとするのならエプロンとかですかね…一応僕もアシスタントとして参加するので。まぁ考えておいてくれると嬉しいです。じゃあ僕はこれで失礼します」
滝河さんはそう言うと自転車を勢いよく漕いでそのまま帰って行った。私は滝河さんが見えなくなってから歩きを進めてＳＰＡＣＥへ向かい、湊さん達と落ち合い練習を開始した。和都は演劇部に顔を出しに行くから今日はＲｏｓｅｌｉａの練習を見に行けない、と事前に連絡をもらってる。
「ふぅ…紗夜、今日は調子いいみたいね。何かあったのかしら？」
「へっ？いえ、そんな事は…ありませんよ」
「大方、和都の事かしら？」
「ぶふっ!?」
湊さんの発言に、私は柄にもなく吹き出しそうになってしまう。珍しい生き物を見かけたかのように宇田川さんと今井さんが私を見てニヤニヤしていた。
「う、宇田川さんっ！今井さん！なんでニヤニヤしてるんですかっ!?」
「いやぁ～、紗夜ってワトの事になるとほんっといつものクールさが無くなるなって思ってさ☆ね、あこ？」
「うんっ！でも華宮先輩の事をそのぐらい好きだってことですよね紗夜さん？」

「う、うぐぐ／／／／／」
「あ～♪紗夜が照れてる～♪」
「て、照れてなんかないですっ!!くぅ……」
　恥ずかしい…けど調子が良いということは否定はしない。最近和都の事を考えたり一緒にいたりすると胸のドキドキが止まらないというか…まだ、よく分からないことばっかりですね。
　一通り曲の通しを終えて休憩に入ると今井さんがクッキーの入った小包みをみんなに渡していた。
「みんな～ちょっと休憩しよ～」
「ありがと、リサ」
「いつもありがとリサ姉～！」
「はい、燐子と紗夜も」
「今井さん…ありがとうございます」
「ありがとうございます」
　クッキーを渡されてさっきの滝河さんの言葉を思い出す。
『土曜日につぐみの家でお菓子作り教室を開くって事になってそれでチラシ配ったりするのを手伝ったりしてるんです』
「……お菓子作り教室、ですか」
「ん～？紗夜どうしたの？」
「い、いえ。先程滝河さんと話していた時にちょっと色々あって」
「滝河さん、ってことは雄天か！へぇ～、紗夜と雄天ってなんか意外な組み合わせだね？あんまり接点無いと思ってたよアタシ」
　そんなことを話しながら休憩を終えて私達はまた演奏を始める。5分休憩を挟みながら演奏する内にスタジオを借りている規定の時間まできていた。
「ふぅ…今日はここまでね。明日の練習はオフだからって練習は怠らないでね」
「ふっへぇ…お疲れ様でしたぁ…りんりーん！一緒に帰ろ～！」
「あ、ま、待って…あこちゃん、早いよ…」
　宇田川さんは白金さんを連れて勢いよくスタジオを出て行く。続いて私と湊さん、今井さんが鍵を閉めたのを確認してスタジオを出

た。湊さんと今井さんと分かれた後、私は真っ直ぐ家に向かって帰路を歩いていく。
（お菓子作り教室のこともあるけれど和都との初デートのこともあるし…）
　そう思っているとスマホが鳴るので取り出すと和都からだった。何かと思い電話に出る。
「もしもし、和都？」
『紗夜か？今日の朝さ、初デートのこと話したじゃん？』
「っ!?え、ええ／／／／／」
『実は…明日土曜日だからどこか行こうかって思ってたんだけど…バ薫の野郎が……』
「…瀬田さんの事ですか？」
『んあぁ…ちっと部活で強制参加型のイベントあるって事今言われて…スマン！』
「な、成程…だいたい分かりました」
『ほんっとに悪ぃ！あのバカあとでシめる！』
　そう言って和都は電話を切った。
「……和都は和都で大変ね…」
　都合が入ってしまったとはいえ明日暇になってしまった私。部屋でのギターの練習も考えたが、お菓子作り教室のチラシをもらっていたことを思い出した。
「……エプロン、どこにしまってあるかしら？」

薫ｓｉｄｅ

～演劇部　部室～

「薫、どうして別の学校の私が羽丘の行事に、しかも勝手に参加させられることになってるのかしら？」
「なぁ…バ薫、なんで明日あるイベントを今日言ったんだ？サプライズとかそう言うのはいいからよぉ…な？」

「ちーちゃ…千聖、和都。悪かったから…荒縄を解いてくれないか？2人とも、顔が怖いよ？美形が台無ｓ」
『あぁぁん!?』
鬼のような形相に私は思わず萎縮する。
「ひっ…まっ、麻弥っ!!た、助けてくれっ!?」
「薫さん…今回ばかりはジブン、助け舟出されてもフォローできませんよ…」
麻弥に助けを求めるも、苦笑いで返される。
「……は、儚にゃい」
「薫、どうやら貴女にはお説教が必要みたいね？」
「バ薫…いくらなんでも俺だって我慢出来ないことあるの知ってるよなぁ…？」
「……ご、」
『ご？』
「……ごめんなさあぁぁぁいぃっ!!!!!」
この後、私は千聖と和都に1時間ひたすら謝り倒した。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０３　氷川紗夜、初めてのクッキー作り

紗夜ｓｉｄｅ

～氷川家　紗夜の部屋～

「おねぇちゃあ～～んっ！リサちーから聞いたよ！今日はＲｏｓｅｌｉａの練習ないんでしょ!?すっごく晴れてるしるんっ♪ってなるからあたしと一緒にどこか遊び行こーよー！ねーえー！」

「んぐぐ…離しなさい日菜！」

羽沢さんの家へ向かおうとする私の足に日菜がしがみつき必死に引き留めようとする。が、私はなんとかして部屋を出ようとする。

「今日は羽沢さん家に行かなきゃ行けないって前から言っていたじゃない」

「えー！じゃああたしも連れてってー！」

「ダメよ！それよりも日菜、パスパレは練習無いの？」

「千聖ちゃんがドラマの撮影だし彩ちゃんはバイト、麻弥ちゃんはクイズ番組の特番だし、あたしは次のライブまで練習しなくてももう覚えたからいいかなーって」

笑いながら日菜はそう言うけどこの子のそういうことを平気で言ってるのが直らないのかしら…まぁ、直る見込みも余地も無いに等しいのだけど。

「またあなたはそんな…」

私は日菜の手を振りほどく。

「とにかく！私は忙しいのよ、遊びに行くなら他の誰かを誘って行きなさい！」

私はそう言って部屋を出ていき、羽沢さんの家へ向かった。

日菜ｓｉｄｅ

「ぶーぶー…残念だぁ…しょんぼりだぁ…」
　あたしは自分の部屋に戻ってベッドにダイブする。
「前みたいに突き放したり厳しくなってないからいいけど…あたしにもかまって欲しいのー！」
　枕を抱きしめてゴロゴロとベッドを転がり回る。和都くんとデートしてイチャイチャしたりするのが多くなって来てるのが羨ましい…あんな風に笑ったり表情を変えるおねーちゃんを間近で見れるの羨ましー！和都くんずるーい！
「…まぁこうしてても仕方ないし、彩ちゃんのバイト先に遊びに行こーっと！」
　あたしはベッドから起き上がってカバンを持って部屋を出て行った。

紗夜ｓｉｄｅ

「後ろから日菜が着いてきて…ないわね」
　時折後ろを振り返りながら羽沢珈琲店の前まで来た私は日菜がストーキングして来てないかを確認する。ＲｏｓｅｌｉａのＬＩＶＥの時に変装までして来るくらいだから警戒はしていたけど…
「まぁ、大丈夫よね…日菜は何度言っても分からない子じゃないのは分かってるし」
　私はほっと胸をなで下ろし、羽沢さんと滝川さんが待つ店の中へ入る。
「紗夜さん！おはようございます！」
「あ、紗夜さん来てくれたんですね」
　そこにはせっせと準備をする羽沢さんと滝川さん以外にも今日のお菓子作り教室の参加者が沢山いた。こんなにいるなんて思わなかったわ…
「今日はよろしくお願いします」
「そ、そんなに畏まらなくても大丈夫ですよぉ～。ね、雄天くん？」

「そうですよ紗夜さん」
　滝川さんは眼鏡を掛けて髪をヘアピンで留める。
「折角参加してくれたんですから気難しく行かずに楽しくやりましょう。それに…」
　滝川さんは私にしか聞こえないような声で囁く。
「クッキー、和都の為に覚えたいんじゃないんですか？」
「っ!?／／／／／」
　私は滝川さんの言葉に思わず後退りする。私は息を整え滝川さんに詰め寄り小声で問いかける。
「和都から聞いたんですかっ!?」
「いや聞いてませんよ…それ以前に2人が付き合ってることを和都と同じクラスの僕が知らないとでも思ってる方が逆にすごいと思いますけどね…」
「う、うぅ…」
「大丈夫ですよ、その辺ちゃんとサポートしますから。ね？」
「……それを破ったら1ヶ月和都と私にポテト奢りですからね」
「わ、わかりました…」
　滝川さんが約束を破るような人ではないことは日菜から聞いてますし分かってはいるけど一応保険をかけておかなければ。…そろそろ話を戻しましょう。
「羽沢さん、今回のお菓子作りにアイシングクッキーとありましたがどのようなものなんです？」
「えっと、アイシングって言うのは普通のクッキーに砂糖や卵白を使って着色したりデコレーションすることです！ですからやることは、普通のクッキーを焼いて、デコレーションするだけなので難しくありませんよ」
「上手くできればいいのだけれど…」
「そんなに心配しないで平気ですっ！」
　私が不安になっていると羽沢さんが励ましてくれた。
「テーブルの上に置いてある薄力粉とバター、あとは砂糖をこねてクッキーの生地を作るだけですよ。詳しくはこれから私や雄天くん、

お母さんから説明しますのでもし分からないことがあったらなんでも聞いてくださいね！」
「は、はい。ありがとうございます」
「つぐみー、ちょっといいかしらー？」
「どうしたのお母さん？あ、紗夜さんすいませんすぐ戻りますから」
　羽沢さんはそのまま店の厨房に入っていった。
（そう言えば和都は今頃瀬田さんや白鷺さん達と劇のイベントだったわよね？和都の話だと今日行く事を昨日伝えられたとか…大丈夫かしら？）
　ちょっとした不安も過ったが和都なら大丈夫だろうと思いながらもお菓子作り教室が始まった。

日菜ｓｉｄｅ

～ファーストフード店～

「そんなわけでおねーちゃんについて来ちゃだめーって言われちゃったの！彩ちゃんどう思うー？」
「ひ、日菜ちゃん…今バイト中なんだけど…」
「どう誘ったらよかったかなー？」
「お願いだから注文してっ!?」
　あたしはポテトとホットコーヒーを頼んでテラス席の空いてる席に座る。
「はぁ、おねーちゃんと来たかったなぁ…もぐもぐ…美味ひぃ」
　数十分でポテトを食べ終えコーヒーを飲みながら雲ひとつない青空を見る。
「こーんなにいい天気なのにおねーちゃんといれないなんてな～」
「あれー？ヒナ？もしかして１人？」
　１人で呟いてると買い物帰りなのか手荷物が多いリサちーがあたしの所にやってくる。
「あ！リサちーっ！ねぇ聞いてよおねーちゃんがさぁ…」

あたしはリサちーに朝あったことを話す。
「ってことがあったのー！」
「へぇ～紗夜がつぐみの家のお菓子作り教室にねぇ…」
「最近突き放されることはなくなったのはいいんだけど構って欲しくて…それでリサちーに相談なんだけどさ」
「ん～？アタシに相談？いいよ☆ドーンときなさい」
「ホントにっ!?じゃあ…おねーちゃんに夜這いして一緒に朝迎えたいんだけｄ」
「ヒナ、１回深呼吸しよっか～☆」

紗夜ｓｉｄｅ

（あれ？今なんか寒気が…気の所為かしら）
クッキー生地を作る最中、何かを感じた私は生地を混ぜていたヘラを置く。
（またどこかで日菜が私の事を話してるのかしらか…まぁいいわ。今はそれよりもこっちね…）
私が見つめるその先…ヘラで混ぜていたボウルの中には薄力粉と溶かしたバター、砂糖を混ぜた物がある。
（どのくらい混ぜればクッキー生地が出来るのかしら？分量は事前に羽沢さん達が測ってくれたから大丈夫だとは言っていたけど…もしどこかで間違えてたかと思うと…んん…）
「紗夜さん？どうしたんですか？さっきから唸ってますけど…」
悩んでいると羽沢さんが後ろから声をかけてくる。思わず私は驚いて飛び上がりそうになってしまった。
「羽沢さんっ!?い、いえその…今生地を混ぜていたんですけど…どのくらい混ぜればいいか分からなくて…」
「そうだったんですね！ちょっと見せてもらえます？」
羽沢さんは私が混ぜていたボウルを手に取る。
「……もう少しでいい感じになりますよ！」
「も、もう少し？具体的には…」

「具体的にはって言われても…普通のクッキーと同じって言うか…とにかく材料が纏まるようにしっかりと混ぜればいいと思います！」
「と、とりあえずやってみます。ありがとうございます」
　私は言われた通りに材料が纏まるようにヘラで生地を混ぜる。混ぜていくこと数分…生地が固まってきてそれらしい色にもなっていた。
「こんな感じでしょうか…？」
「いい感じですよ紗夜さん！」
　羽沢さんは私に付き添いでクッキー作りを教えてくれている。申し訳ないが今は羽沢さんに頼らせてもらいます。
「次は生地を５ｃｍ位にしてもらえば大丈夫です！」
「５ｃｍ…？羽沢さん、ものさし持ってませんか？」
「え？ものさしですか？一応ありますけど…」
　私は羽沢さんに手渡されたものさしを使って生地の長さを図る。
「これで５ｃｍね…」
「さ、紗夜さん!?絶対に５ｃｍってわけじゃないですよ～っ!?」
「ですがしかし…万一のこともあると思ったので…私がものさしさえ持ってきてれば羽沢さんの手を煩わせること無かったのに…迂闊でした」
「そんな敵キャラクターが決闘に負けた時みたいな感じで言われても…ははは」
　滝川さんも苦笑いの中、お菓子作りは終盤を迎えた。クッキー生地を型でくり抜いてから、教わった通りにアイシングして行きクッキーをオーブンに入れてあとは焼き上がりを待つばかり。
「ふぅ…クッキー作りがこんなに大変だとは思いませんでした」
　マカロンは自分で作れるようになったし、和都からはレモンの蜂蜜付けを教わり、羽沢さんや滝川さん達からはクッキーの作り方を教わった。最初はこういう事には興味が無くて、ギターを練習するばかりの毎日だったのだけどいざ作ってみるとここまで自分がお菓子作りにのめり込めるのだと知ることが出来た。
「でも紗夜さん、ちゃんと作れてたのでよかったと思いますよ…も、も

のさしっ…ぷふっ」
「なんで笑うんですか滝川さんっ！」
「そ、そうだよ雄天くん…紗夜さんに失礼…っふふ」
「羽沢さんまで!?」
　なんで2人が笑いを堪えてるのかが分からないままだったが無事にクッキーは焼きあがった。滝川さんと羽沢さんは教える立場もあり、とても美味しそうに焼きあがっていた。私は自分の作ったクッキーをオーブンから取り出す。
「おぉ…」
　見てみると初めてにしては上出来ではないかと思わんばかりの出来上がりだった。しかし問題は味です味。見た目が良くても問題はそこなんですから。そんな時滝川さんが私に声をかける。
「紗夜さん、もし味が気になるって言うなら一つだけなら味見してみても構いませんよ?」
「ありがとうございます。では…」
　自分の作ったクッキーを小さく割って口内にいれる。しっとりとした舌触りが口の中を巡っていき最後まで味わえる、そんな味だった。
「お、美味しぃ…」
　初めてでここまで出来るなんて…滝川さんと羽沢さんには感謝しないといけませんね。それに…今後クッキーとかを1人で作って和都に食べさせる機会があれば食べさせることも出来るし褒めてもらえるかもしれませんね。思わず褒めてもらえる所まで妄想に浸ってしまったが最後の仕上げも無事に終わり見事、クッキーが完成した。
「羽沢さん、滝川さん、今日は本当にありがとうございました」
　お菓子作り教室が終わり、私は2人に頭を下げる。
「そ、そんな頭を下げられる程のことなんてしてませんよっ！」
「僕とつぐみはただアドバイスとかしただけですよ、最後は紗夜さんがちゃーんとやってたじゃないですか」
「いえ、完成まで辿り着けたのはお二人のおかげです」
　私は頭をもう一度下げ、帰ろうとすると羽沢さんが駆け寄ってく

る。
「あ、あの紗夜さん！もし良かったらＬＩＮ○交換しませんか？」
「え？」
「え、えっと…お菓子作りの事でもし分からないことあったら聞けますし…私個人では紗夜さんとお話したいなーって思ってて…ダメです、か？」
　断る理由も無いので私は自分の○ＩＮＥに羽沢さんを登録して、作ったクッキーの包をもって、羽沢珈琲店を出た。帰る途中に日菜と今井さんと偶然にもすれ違い今日のことを話したりした。日菜が目を光らせてクッキーを食べたがっていたし今井さんには
「今度アタシと一緒にお菓子作ってみない？それで友希那たちに差し入れしたりさー…」
　と誘われたから時間の空いてる日にでも、と一言言った。改めて思うと今日はとても充実した１日を過ごせたなと私は思った。

和都ｓｉｄｅ

「ふぅ…やーっと終わった。バ薫の野郎、今度変なサプライズでもしたらまた千聖さんにシめてもらうとするか」
　演劇部の部活のイベントを漸く終えた俺はペットボトルの飲み物を飲みながら帰路を歩いて行く。帰ったら燐子さんとあこ達とＮＦＯするかな、そう思っていると後ろから声をかけられた。
「あなたが、華宮和都ですね？」
「あ？」
　振り向くとそこに居たのは長髪で猫耳のついたヘッドホンを付けて、制服の上着に手を突っ込み自信に溢れた表情で俺を見ている女子がいた。やたら身長低くね？と思うが口には出さないでおいた。言ったらどつかれそうだしな、うん。
「そうだけど？つーか誰だお前は？」
「ふふ、これは失礼しました。わたくし、プロデューサーのチュチュと申します」

チュチュと名乗ったその女は、そのまま俺に歩み寄って来た。
「単刀直入に言います。華宮和都、貴方のその才能と力を私の為に使ってみない？」

Ｅｐｉｓｏｄｅ０４　プロデューサー・チュチュ

和都ｓｉｄｅ

「単刀直入に言います。華宮和都、貴方のその才能を私の為に使ってみない？」

チュチュと名乗る女の突然の提案に俺は口を開く。

「はぁ？何言ってんだ？俺の才能？そもそもどこで俺を知った？何故俺を知ってる？」

「Ｓｏｒｒｙ、質問が多いわよ？ひとつにしなさい」

「そうか。じゃあまず聞かせろ？どこで俺を知ったんだ？」

「Ｙｅｓ！ではそこからお話しましょう！」

チュチュは腕を組み、見下ろす様な態度で話し出す。

「華宮コーポレーションを知ったのは私がこの計画を立ててから間もない頃です。貴方のお父様、華宮ラセツが経営なさってる会社のＨＰを見かけましてね…」

―――――――――――――――――――――――――――

～１週間前～

チュチュｓｉｄｅ

『華宮コーポレーション…？確かこの街の超大手の大企業だったわね』

最強の音楽を作り、ガールズバンド時代を終わらせ革命を起こす。そう決めた私はパソコンに向かって調べ物をしていた時、偶然その広告をみかけた。

『華宮ラセツ…へええ』
　載っている記事には会社と繋がってる企業や組織、プロデュースした数々の飲食店、私の狙っている音楽関連の事までもがこれでもかと言うくらいだった。目が口付けになったわ、これが人生を謳歌し人の上に立ち、数多数々を成功させてきた者なのね!?
『Ｗｏｗ…Ｅｘｃｅｌｌｅｎｔ!!ｂｅａｕｔｉｆｕｌ!!どれもこれも素晴らしいものばかりだわ!』
　華宮コーポレーションの記事やなんやらを見ていた私はまたある記事に目が行く。それは華宮ラセツのインタビュー記事だ。
　華宮ラセツ『会社の運営は総裁としても大変です。しかし努力と、それを目指し進んでいくという志さえあれば人は必ず人生の中で自分の価値観や大切なものに築けるのだと思います。昔から息子にも言ってあるんです、努力は決して人を裏切らないという事をね。それもあってか息子はとても逞しく育ち今も高校で青春してるでしょう!いやぁ!親としても鼻が高いですなぁ!なっはっはー!』
　この記事を見て私はある事を思いついた。そう、華宮ラセツの息子に接近し、私の計画を話した上で協力してもらう事を。
『ふふふ…待ってなさい華宮ラセツの息子!』
　それから私は華宮ラセツの息子のことについてネットで調べたりした。さすがに住所までわからなかったがどこの高校に通ってるかまでは分かったわ。
『華宮和都（はなみや　わと）…羽丘の2年生なのね』
　私は華宮和都の通っている羽丘学園に乗り込もうとした。が、不方侵入して捕まって没シュートされる訳にも行かないし放課後の時間になるまで待つしかなかった。校門前で待てば当然怪しまれるから待ち伏せは別の場所にしたけどね。
（ここなら分からないはず…　さぁ来なさい華宮和都!）
　そうして待つこと数十分、校門から生徒が沢山出てくるが華宮和都らしき人物が出て来る気配が一向にない。諦めないで待つこと数分、それらしき人物が校門を出て止まり、スマホを見始めた。
（んん?あの緑色の髪の男子生徒…彼が華宮和都かしら?と、とにか

くアポ取らないとっ！）
『和都、燐子が来るまでの間、スタジオ練習を手伝って欲しいのだけど…キーボードの合わせをしたいの。生徒会で１５分程遅れるらしいわ』
　その時隣に女子生徒がやってきた。しかもその男子に『和都』と言っていたから彼が確実に華宮和都だということは分かった。それだけではない、よく見たらその女はガールズバンド時代を担うとも言われるバンド『Ｒｏｓｅｌｉａ』のボーカル湊友希那だった。
（ええっ!?なんで!?なんでＲｏｓｅｌｉａの湊友希那が!?）
　でもこれはまたとないチャンスだったわ。華宮和都だけでなくＲｏｓｅｌｉａの湊友希那にも私の計画に引き込むチャンスが舞い降りたのだから。
『まーた合わせか？』
『当然よ。ライブまで時間が無いの。今度あるライブハウスｄＵｂのライブに向けて完璧にしておきたいの』
『わーったから。燐子さん来るまでだぞ？そういやリサは？』
（何を話してるか分からないわ…一体何を話しているの!?でも今しかない！）
　私は隠れている所から出ていこうとするが、それを遮るかのようにもう１人が華宮和都と湊友希那に割って入ってきた。
『ワトー、友希那～！やっほ～☆』
『おうわビックリした！』
『リサ、ビックリさせないでくれるかしら？』
『あはは、ごめんごめーん♪ちょっと驚かしたくて☆』
（うそ!?Ｒｏｓｅｌｉａの今井リサまで!?）
　本来ならここで華宮和都にアポを取って協力を要請したかったが予想外のことがありすぎて結局アポを忘れてしまった…。３人がいなくなってから私は隠れていた所から出て行きアジト基い家に帰ったわ。
『悔しーい！それ以上に華宮和都がＲｏｓｅｌｉａと知り合いだったなんて驚愕だわ！いいや！この位で諦める訳には行かないわ！

ぜーったいに成功させてやるんだから！待ってなさい華宮和都！そしてＲｏｓｅｌｉａぁぁ!!』

――――――――――――――――――――――――

「…と、言うわけで私は貴方を知ったわけ。ＯＫ？」

チュチュの話を聞き終えてあらかた理解した。つまり自分の音楽の為に協力してくれ、ってことだろう。

「まぁだいたい分かった。ウチの会社の一部は確かに音楽プロデュースもやってるしな。俺も一通り楽器は演奏できる」

「だったら…！」

「けど、今ここで決断をする訳にはいかねぇな」

俺の発言にチュチュは眉を顰める。

「ほ、Ｗｈｙ？なんで？貴方の才能を埋もれさせるなんて勿体ないわよ!!」

「俺はバンドはやらねぇ」

「だったらなぜＲｏｓｅｌｉａの湊友希那と一緒に居るのよ！理解できないわ！バンドとかをやってないのに関わるなんて変よ！」

「あ？それはあいつらの音合わせとかに付き合ってるだけだからなぁ。それに友希那とリサは歳が１つ上だけど幼馴染なんだよ。助けになるなら音合わせくらいやる、どこにも変なとこはないだろ？」

「ぐぬぬぅ…」

チュチュは後退りながらも必死に俺に協力をして欲しそうにする。

そこで俺は気になったことをチュチュに聞いてみることにした。

「おい、もし俺が仮にお前に協力をするってなったとしてもその後はどうするんだ？」

「よくぞ聞いてくれましたね！」

待ってたぞと言わんばりにチュチュの顔が明るくなる。

「貴方を私のプロデュースで最強のミュージシャンにする！それと同時にＲｏｓｅｌｉａをスカウトするわ！私の音楽を奏れば最強になれる！演出、パフォーマンスだけでなくライブ会場から物販まで全て

私が用意するわ！これほど互いが得する美味しい話はないと思うの！」
　チュチュは自分の野望の為に俺をスカウトするだけだと思っていたがまさか友希那達まで手を出すとは想像してなかった。あいつらは、紗夜達は自分たちの音楽で頂点をつかむって言っていた。自身の野望の為とはいえＲｏｓｅｌｉａの、紗夜達の夢をこんな形で終わらせる訳には行かない。そして俺もチュチュの、こいつの下に成り下がる訳には行かない。そう思った俺は口を開く。
「チュチュって言ったな。ありがたい話だが俺はＲｏｓｅｌｉａの、友希那達の夢を応援するって決めたんだ。丁重に断らせてもらう」
　じゃあな、と一言言って立ち去ろうとするが向こうはそれでも尚、諦めていなかった。
「Ｗｈｙ？なんでどうして？貴方の才能が勿体ないわ！」
「自分の私利私欲の為に誰かに成り下がる程俺も頭が悪くないからな」
　俺はチュチュが掴んでいた袖を振りほどき、背を向けてそのまま歩いて行った。

チュチュｓｉｄｅ

「……」
　華宮和都が立ち去ってから私はその場に数分立ち尽くす。そして近くに置いてあるゴミ箱に向かって怒りをぶち負かすように強烈な蹴りを噛ます。ドガッと音を立てゴミ箱が倒れ、ガサガサと中身が崩れ落ちる。
「んぎぎぃ…なんでなんでなんでよ！信じられないわ!!こーんなオイシイ誘いを断るだけじゃなく私のことを『私利私欲』ですってぇ!?何も知らない癖にいいぃぃ!!華宮和都めぇぇぇ！」
　アイツだけは許さない…絶対に許さない！私は蹴ったゴミ箱とその中身を元の場所に戻す。
「…そう言えばアイツと湊友希那は幼馴染だって言ってたわねぇ。し

かも今度、ｄｕｂでＬＩＶＥもある…」
なら…私のやることは１つ。今度のＲｏｓｅｌｉａのＬＩＶＥでＲｏｓｅｌｉａをプロデュースする、そして私の最強のバンドにする！更に華宮和都をぶっ潰してやる！徹底的に叩きのめせば自分の愚かさってものを身に染みるほどわかるでしょう。それで改めて私の手中に収める。
「ふふふふ、待ってなさい華宮和都…Ｒｏｓｅｌｉａアアア！」

和都ｓｉｄｅ

～華宮邸　和都の部屋～

帰ってきて早々、愚痴を漏らしながら俺はネトゲに勤しむ。もちろん、あこと燐子さんと一緒にボイスチャットしながらやっている。
和都『くそ…なんだったんだあのガキ…』
あこ『和都先輩どうかしましたかー？』
和都『ああいや、さっきちょっと変なやつに絡まれたんだよ』
あこ『変なやつってどんな人ですか？』
和都『なんか俺の事をスカウトして最強のミュージシャンにしてやる！ってふざけたことを抜かしてたんだよ…おっととやべ、ＭＰ回復ポーション使わねーと』
燐子『す、スカウト…ですか？それって、芸能プロダクションとか…そういう類だったりしませんか（、・ω・´）？』
あこ『ええーっ!?芸能プロダクションからのスカウトぉーっ!?』
和都『いやいやちげーよ。自称プロ音楽プロデューサーで俺らより年下』
燐子『年下でプロの音楽プロデューサー…ですか（。д。）ビックリ』
和都『そうなんですよ。しかもやたら態度が気に食わないし私利私欲だったから断ったんです。あ、そろそろ倒せそうですよー』
燐子『そ…そうですね。これで…クエストクリアです（？∀、？）』

あこ『やったー倒せたー！ありがとりんりーん！和都先輩ー！じゃあそろそろ遅いからあこ落ちまーす！お疲れ様でしたー！』

燐子『うん…おつかれあこちゃん（???☒ ― ☒??）じゃあ華宮くん、わたしも落ちるので失礼します……』

和都『ふーい。お疲れ様でーっす』

ボイスチャットが終わり、ゲームのセーブを確認した俺は疲れた身体を養うためにすぐさまベッドにダイブする。

「あー疲れた…とりあえずもう寝よう…」

疲れが溜まっていたからた俺は2分と待たずにすぐ眠りについた。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０５　にゃんにゃんな休日

～湊家　友希那の部屋～

友希那ｓｉｄｅ

「ふぅ…まだ、かかりそうね」

Ｒｏｓｅｌｉａでの練習が無いから今度のＬＩＶＥに向けての新曲を作ってはいるものの…全然イメージが湧いてこない。Ｃｉｒｃｌｅもｇａｌａｘｙも空いてなかったのにはびっくりしたわ。

「ライブまであまり時間が無いわ…早くＲｏｓｅｌｉａに相応しい、最高の曲を作らないと…」

飴玉がたくさん入った袋から飴をひとつ取り、口に放り込む。舌で飴を舐めながらヘッドホンを手に取り、もう一度作業に戻ろうとすると部屋のドアをノックする音が聞こえた。私はヘッドホンを首にかけて机から立ち、部屋のドアを開けるとお父さんが立っていた。

「友希那、今時間あるか？」

「お父さん？どうしたの？」

「いや、ここ最近ずっと休みの日は部屋にいてばかりだから少し外でリラックスしてきたらどうかな、と思って声をかけたんだ。みたところ…難航してるみたいだから」

苦い表情になってるお父さんが見つめるその先はパートごとに仕分けられた楽譜と譜面、飴玉を開けた袋が散乱している机だった。

「うっ。確かに難航してるけどライブが近いから一分一秒無駄にすることは…」

「だからこそリラックスが必要なのは…友希那も分からないわけじゃないだろ？」

「そうだけど…」

父さんはニコッと笑うと私の肩を掴む。

「うん、分かってるなら大丈夫。友希那なら最高の曲を作れるさ」

お父さんはそう言うとドアを閉めて行った。私は机に向かい、作曲

に戻ろうとした。が、折角お父さんがリラックスを促してくれたわけなのだし、もしかしたら良いフレーズも思いつくかもしれない。そう思ったのかハンガーにかけてあったカーディガンを羽織り、財布などを持って玄関を出た。

（さて…外に出たのはいいのだけど、どこに行こうかしら…）

そう思いながら歩きを進めていると、いつの間にか公園まで来てしまっていた。私は1人ベンチに座り、雲ひとつない青空を見上げる。

「今日はいい天気ね…」

日差しが丁度いい温度でおもわず眠くなってしまいそうだわ…ふぁぁと小さく欠伸をしてウトウトしてると聞き慣れた動物の鳴き声が聞こえてきた。

「ミャー」

「!?」

ふと、座っている横に目を向けるとそこに居たのは耳が垂れた灰色の猫だった。あまりにも眠そうにしていたのか私が目を合わせると小さく欠伸をした。

「ひゃっ…か、かわいい…」

私は公園に誰もいないことを確認して、そっとその猫の頭を撫でる。柔らかく暖かい猫毛は日差しを受けて極上の肌触りで病みつきになってしまう。

「みゃぁぁ～」

「ふふ…にゃーんちゃーん。ふふっ、可愛いねー」

「にゃむぅ…にゃぁぁ」

猫の顎を指で擽るように触ると擽ったいのか甘い声を出す。

「これが好きなのね？」

「みゃぁぁ…♪」

こういった日も悪くないわね…。そう思いながら1匹の猫と戯れること数分、満足いくまでリラックスした私は猫を膝上からゆっくり離して地面に置く。

「じゃあ、私はそろそろ行くわね」

最後に猫の頭をゆっくり撫でて、その場を立ち去ろうとした。その

時、
「みゃぁ～？」
　私が帰ろうとすると、どこに行くの？もうちょっとだけ撫でて欲しいの、と言わんばりに私のことを見つめてきた。正直言うともう少しだけ撫でたいし愛でたいがフレーズやら諸々考えないといけない。
「ごめんなさい、そろそろ家に帰ってやらなきゃいけない事があるの。また公園に来たら撫でてあげるから…ね？」
「にゃぅ…？」
　私はそう言って公園を後にした。曲作りに難航してなければもっと可愛がってあげれたかしら…そんなことを考えながら玄関の扉を開ける。
「ただいま」
「おかえり友希那。リラックスは出来たか…って、後ろの猫はどうしたんだ？拾ってきたのか？」
「え？後ろ…？」
　ふと私が振り向くとそこに居たのはさっき公園で戯れた垂れ耳猫だった。
「にゃあぁ～」
「あなた…もしかして公園からついてきたの？」
「んにゃ～」
　私の脚に頬ずりしながら鳴く仕草に思わずキュンとしてしまう。ひょいと持ち上げてみると嬉しかったのか手足を軽くばたつかせていた。
「ふふ…可愛い。って、あら？」
「どうした友希那？」
「よく見たらこの子…首輪付けてた痕があるわ」
「付けてた痕って、もしかして捨てられてたってことなのか？」
　もしそうだとしたら…私はそれを確かめる為にさっきの公園まで走って戻る。草むらや木の根元ら辺でガサガサしてると予想通りだったのか、猫が入っていたと思われるダンボール箱があった。覗くとそこには空になった猫用の餌、魚の缶詰が散乱し、抜け落ちた数本

の猫毛もあり相当汚くなっていた。
「やっぱり…あなた、捨てられたのね？」
「んにゃぁ～」
「……」
　私は家に戻り、この事をお父さんに話した。
「そうか…ありがとう友希那」
「ね、ねぇお父さん…」
「どうした友希那？」
「この猫…家で飼うこと出来ないかしら？」
　私の言葉にお父さんは目を丸くした。
「小さい頃は飼っていたが…大丈夫なのか？」
「私が責任もって世話するわ、この子を放っておけないの」
「…そうか。分かった、お母さんには僕から伝えておくよ、しっかり面倒みるんだぞ」
　あまりにも、あっさり許諾してくれてちょっと驚いたがまた猫を飼えるということにちょっとほくそ笑みながら私は部屋に戻った。
ベットにダイブして猫の形をした枕に頭をぽふぽふする。
「ふぅ…飼える嬉しさに変な声が出そうになったわ」
「みゃあ～？」
「あら、あなたついてきたのね？」
　どうしたのかというように擦り寄ってきたので、私は頭を撫でて心配を和らげようとする。
「大丈夫、今日から私達が新しい飼い主よ。前の主人がどうであれあなたを捨てるなんてことはしないから安心して」
「んにゃにゃー」
「さて…あなたの名前を決めなきゃいけないわね」
　どんな名前がいいかしら？ミケ…タマ…マカロン…すあま？
「安直すぎるわね…」
　机に散乱していたＲｏｓｅｌｉａの楽譜をまとめて棚に置きながらぴったりの名前を考える為にもう一度猫を見てみる。
「にゃ～ぁ？」

「どんな名前がいいかしら…」
灰色で…垂れ耳で…細めだから眠たそうにしてるわね。それから何個か名前候補を考えるけど良いのが思い浮かばない。どんな名前がいいか考えてると、猫が私の髪飾りが気になったのか触りたそうに手を伸ばしている。
「どうしたの？これ…気になるの？」
「みゃおぉ」
私は蝶の髪飾りを外して猫に持たせると肉球でぺちぺちしたり、柔らかな毛で頬ずりしだす。
「私の髪飾り、そんなに好きかしら？可愛いわね…」
それを見てると、ふと名前が思い浮かんだ。
（蝶…アゲハ蝶、アゲハは英語でｓｗａｌｌｏｗｔａｉｌ…スワロウテイル…テイル！なんでどうかしら）
「…テイル」
「にゃ？」
「あなたの名前は、テイルよ。髪飾りを気に入ってたし…どうかしら？」
テイルと呼ばれた猫は気に入ったのか嬉しそうに、「うにゃぁ」と鳴き、膝にすり寄ってきた。
「ふふ…気に入ってくれたのかしら？これからよろしく、テイル」
「にゃぁ♪」
こうして、私達の家に新しい家族が、灰色垂れ耳猫のテイルが仲間になりました。

～数日後～

テイルを飼飼い始めてから数日経ったある日、私達ＲｏｓｅｌｉａはＧａｌａｘｙでライブの練習をしていた。新曲だからある程度進行が遅くなる、なんてことは無くＲｏｓｅｌｉａのメンバーはすぐにテンポを掴み自分のものにしていた。

「ふう…そろそろ時間ね」
「んんっ、おつかれ～☆クッキー作ってきたけど食べる～？」
「リサ姉のクッキー食べたーい！」
「今井さん…ありがとうございます…」
「はい、友希那」
「ありがとうリサ。じゃあ、私はそろそろ帰るわね」
　私は荷物をまとめてスタジオから出ようとすると紗夜が不思議に思ったのか私を引き止める。
「湊さん、ちょっといいですか？」
「？どうしたの紗夜？」
「いえ、ちょっと気になったんです。最近練習終わってから帰るのがいつもより早いなって思ったんです」
「そ、そうかしら？」
　紗夜は私の目をじっと見つめてくる。紗夜が眉を顰めて見つめること数分…
「いえ、私が考えすぎてるだけかもしれませんね。すいません」
　勘違いだったのかと思ったのか紗夜はそう言ってギターを背負い、練習スタジオから出て行った。一息ついてんたしもスタジオから出ようとする。
「友希那ー！」
　今度はリサから声をかけられる。
「どうしたのリサ？」
「いやさ、ワトから聞いたんだけど学校帰りに友希那がホームセンターから出てきた所を見たって聞いたんだけど…」
「え？私がホームセンターから？み、見間違いじゃないかしら？」
　私はそそくさとスタジオから出ていき、まっすぐ家まで向かって行った。家に戻ってからは部屋に向かい、テイルを呼ぶ。
「テイル、ご飯よ」
「んにゃっ」
　テイルは掛けられてる学生カバンの中からひょっこりと顔を出すと、そのまま勢いよく飛び出す。私は買い置きしてある猫缶を取り出

し、缶を開けて床に置くと美味しそうに食べ始める。なんで学生カバンの中にいたのかと言うとそこがお気に入りらしく、
「ふふふ、そんなにお腹減ってたの？練習行く前にもご飯出しておいたのに…食いしん坊ね♪」
「んにゃぁ♪むぐむぐ」
「よしよし…」

リサｓｉｄｅ

～今井家　リサの部屋～

「やーっぱり友希那、何か隠してる気がするんだよなー。ワトはどう思う？」
『隠し事ねぇ…どっかでまた野良猫にあげる餌でも買ってたんじゃね？ホームセンター行ってたし猫の餌買ってたってんなら合点いくだろ？』
「そうかな～？」
　アタシはワトと通話しながら最近の友希那のことについて話していた。
『あ、そういや紗夜から聞いたぞ。今度ｄＵｂで新曲含めたライブするんだってな』
「紗夜から聞いてたの～？」
『まぁな。チケットも取り置きしてもらったから明日観に行くし』
「わ～お♪これは紗夜も友希那も楽しみだろうな～☆」
『友希那に新曲の事聞いたんだけど全然教えてくれなくて…どんな曲なのかちょっとだけ…な？』
「ダメダメ。ライブ来てからのお楽しみ」
『ちぇ～、いけず～』
「モカみたいに言ってもだーめ♪」
『へいへい、楽しみにしてますよーだ。んじゃっ』
　ワトはそう言って電話を切った。

「さ～て、アタシもそろそろ寝ようっと☆」
ベッドに取り付けてあった電気スタンドの電源を落とし、アタシはゆっくりと眠りに入った。

Ｅｐｉｓｏｄｅ０６　ＢＲＡＶＥＪＥＷＥＬとｄｕｂとチュチュ

チュチュｓｉｄｅ

「今日は華宮和都が言ってたＲｏｓｅｌｉａのライブの日ね…」
私がこの日をどれだけ待ちわびたことか。……アイツ、華宮和都には分からないはず。あれ程の屈辱と侮蔑の嘲笑をされて誘いを断られ尚且つ私利私欲と謳われ黙ってられるはずもなかった。
「くっくっく…それも今日で終わりだわ！あの一件は水に流して今度こそ計画を実行する！あーはっはっは！」

和都ｓｉｄｅ

「今日のＲｏｓｅｌｉａのライブは１６時から…か」
紗夜から送られてきたＬＩＮ〇を確認して俺はベッドの上で仰向けになる。
「ライブのチケットはリサが取り置きしてくれてるって言ってたからまぁいいとして…暇だな」
演劇部は今日は休みだし紗夜達は今ｄｕｂの方でずっと打ち合わせするからーってことで連絡するのは無理そうだし…
「やべぇ、こんなに暇になったのいつぶりだよ」
やべーよ、作者が仕事疲れでこの小説書けなくてそのまま爆睡決めるくらいやべーよ。最近めっちゃスランプだからなぁ…いけね、リアル事情はこれくらいにしとくか。仕方ないからＮＦＯをやろうとすると、いきなりＬＩＮ〇の着信音が鳴った。紗夜か友希那達からかと思ったが以外にもそれは、同じ演劇部の麻弥さんからだった。
「麻弥さんから？えっと…機材運搬を手伝って欲しい？」
暇すぎて死にそうになっていた俺はベッドから飛び起きる。そして財布やらなんやら諸々の準備を調え家を出た。

「羽丘の校門前にいるので来て貰えませんか…か。ちゃちゃっと終わらせるか」
競輪選手並の速さで自転車を漕ぎながら俺は羽丘まで向かった。

～羽丘学園　校門前～

「うぼあぁ…何だこの量」
漕ぎ続けること数１０分、羽丘の校門前に着いた俺はその機材の多さに圧巻していた。ベースアンプやスピーカー、ギターアンプは勿論のこと、他にもわんさかあって一筋縄では終われなさそうな量を見た俺はさっきの呟きを全力撤回したい。
「いやぁすいません和都さん…これ今度の演劇で薫さんが使うって言ってたので今の内に運搬して置こうと思いましてね…フへへ」
麻弥さんは申し訳なさそうに頭を下げる。事情はよーく分かったが問題はもうひとつあった。
「別に麻弥さんが謝ることじゃないと思うけど…当の本人のバ薫はどこなんすか？呼んで手伝ってもらった方が…」
「それはジブンも考えたんです。それでさっき薫さんに電話したんですよ。そしたら…『申し訳ない、今ハロハピのメンバー全員で南の島にいるんだ。儚いバカンスなんだよ』って言われまして」
「あの野郎…」
ふつふつと怒りが込み上げてくるがここでキレようともバ薫にはなんにも影響しない。ここはあえてぐっと抑える。
「ま、まぁここでどうのこうの言っても仕方ないので…運んじゃいましょうか」
「そうっすね」
バカンスから戻ってきたら千聖さんと一緒にかおちゃん呼びで攻めてやる…そんなアホみたいな野望を抱きつつ俺と麻弥さんは機材運搬を始めた。クソ暑い中機材を部室に運び入れること1時間…
「ふぅ…やっと終わった…」
部室に運び入れ、クーラーをつけて涼んでいると麻弥さんが冷え冷

えの缶ジュースを俺の頬に当てる。
「いやぁ、ありがとうございます和都さん」
「うわっふ!?」
「あわわ!?ビックリさせてすいません！」
「いや別にいいんすけど…」
　俺は貰った缶ジュースを開けてぐいっと一気に飲む。
「ぶへぇ…生き返ったぁ…」
「ごくごく…んんっ、ふぅ…いやあ、ほんとにありがとうございました」
「いや、紗夜たちのライブまで暇だったし問題ないですよ」
「あ、そう言えば湊さん達が言ってるのを見ましたよ。今日Ｒｏｓｅｌｉａのライブをｄｕｂでやるーって。ジブンは日菜さんと行く予定なんですよ」
　麻弥さんが思い出したかのように話す。
「もうすぐ撮影が終わるからーって言ってましたのでそろそろ来る頃だと思うんですよね。本当はパスパレ全員で行けたらなーって思ったんですけど彩さんとイヴさんが雑誌の撮影とインタビュー、千聖さんが夏ドラマの撮影で折が合わなかったんです」
　麻弥さんが言い終わると同時に廊下でドドドドと走ってくるような音が聞こえてきた。そして演劇部のドアを思いっきり開けて日菜さんが入ってくる。
「どーーん！麻弥ちゃんお待たせー…ってあれ？和都くんもいるー？なんでなんでー？」
「うお、本当に来た…」
「あ、日菜さん。実はですね…」
　なんで俺がいるのか不思議に思っている日菜さんに麻弥さんが説明する。
「……と、言うわけでして」
「なろほど～♪和都くんもおねーちゃんのライブ観に行くことになってたんだ～。まぁそうだよね～。おねーちゃんとお付き合いしてるんだし～♪」

「ええっ!?和都さん、紗夜さんとおおおお付き合いしてるんですかぁっ!?」
麻弥さんがあからさまに驚き後退りをした。しかも頬を赤く染めて初めて恋愛をした初々しいカップルみたいな感じになっていた。
「この前もおねーちゃんとお出かけしてたし～?夏服買いに行ってたじゃん♪」
「なんで知ってんすか!?あんたまさかストーカーしてたワケ!?」
「ふっふっふ～、日菜ちゃんをナメてはいけないよー!リサちーと変装してストーキングしてたんだよ!」
「日菜さん…アイドルが堂々とストーキング宣言しちゃアウトですよ?いや、この場合は日菜さんが紗夜さんの事が好きだからもう何とも言えませんね…ふへへ」
麻弥さんが苦笑いになりながらも汗をかいてる日菜さんにドリンクを渡す。それを貰うと日菜さんはグイッと一気に飲み干した。
「ぶっは～っ!!生き返ったぁ～!いよ～っし2人とも、おねーちゃんのライブ行っくよ～!!」
元気を取り戻した日菜さんに手首を掴まれた俺と麻弥さんは涼しい部室から一転し、灼熱の領域へと連行される。
「ちょ、ちょっと待ってください日菜さ～ん!?」
「あっつ…と、とりあえず紗夜達に連絡しとくか…」

紗夜ｓｉｄｅ

～ライブハウスｄｕｂ　控え室～

「あら、和都からだわ」
ライブの準備を一通り終えた私達は控え室で休憩をしていた。今井さんが作ってきたクッキーを摘み、和都特製のハーブティーを飲んでいると和都からＬＩＮ○が届く。
「ワトからー?ねぇねぇ紗夜、なんてきたの～?」
今井さんがにやにやしながら私のスマホを覗きこもうとする。

「何に期待してるか分かりませんが普通の内容ですよ。えっと……ライブハウスに連行されてるなう？」
いつもの様に踵を返し、メールを読むが…連行？今井さんが言うには和都の分のチケットは取り置きしてあるし「今から行く」の一言で大丈夫なはずなのだけど…
「……まさかとは思うけど、いや、そんなわけはないわ」
私は和都に○ＩＮＥを送ってみる。内容は至って簡単でシンプルに「まさか日菜がそこにいるの？」と送るとものの数秒で返信が返ってきた。返信には想像通りの言葉が添えられている。
「……全くあの子は何を考えてるのよ」
まさか日菜と一緒にいるなんて思わなかったわ。ライブの事は言ってなかったはずなのにどこから日菜に伝わったの…？
「多分ヒナの事だからパスパレの皆にでも聞いたんじゃな～い？彩とか麻弥辺りだとアタシは思うな～♪」
「はぁ…」
「ひ、氷川さん…何だか顔色悪いですけど大丈夫ですか…？」
「だ、大丈夫よ白金さん…」
ライブ終わって家に帰ったら説教しないといけないわ、私はそう決意した。その時、ｄｕｂのスタッフが部屋の扉をノックして入ってきた。
「すみませんＲｏｓｅｌｉａのみなさん！最終チェック入りますけど全員いけますか？」
「ええ、わかったわ」
スタッフの言葉に湊さんはいつものように返答する。私達も楽器を持って最終チェックに向かった。

和都ｓｉｄｅ

～ライブハウスｄｕｂ～

「とうちゃーくっ!!」

日菜さんに連行されてきた俺と麻弥さんは汗をかき、息を切らしながらも漸く到着する。なんで俺ら連行した日菜さんは汗全然かいてないのか不思議に思うぞ今日この頃…
「あれー？２人とも汗だくだー？どうしたの～？」
８割、いや１０割アンタのせいだよ!!とは口が裂けても言えるわけなく、適当な愛想笑いでごまかす。
「日菜さんの体力すごいです…ふへ、ふへへ」
流石の麻弥さんも予想外だったのか苦笑いになる。はやく涼みたかった俺はささっとライブハウスに入る。入るとエアコンも効いていて外の猛暑が嘘みたいだった。さすが都内最大のライブハウスと言わんばりに扇風機やテレビ、自販機や音楽雑誌、パンフレットも置いてある。紗夜達がライブするからなのか奥の方では物販店らしきものも開催されていた。
「ア゛ア゛ア゛ア゛…涼しぃ生き返るぅ…」
「そうですね～。ジブン、このまま涼んでいたいですよ」
「そういう訳にはいきませんよ～、俺ら紗夜達のライブ観に来たんですから」
「ですよね～」
「うわぁ…和都くんも麻弥ちゃんもふにゃーってしてる。おねーちゃんのライブチケット取れなくなっちゃうよ～？」
日菜さんが俺と麻弥さんを覗き込む。
「あー、その辺の事は大丈夫っすよ。俺の分はリサが取り置きしてくれてるんで…」
「ぶーぶー！和都くんずるいよー！」
「ずるくないです」
「あはは…日菜さん和都さんもその辺にして…取り敢えずジブンと日菜さんの分、チケット買ってきますので。和都さんは先に行ってて貰えると助かります」
「りょーかいでーす」
俺は受付まで行き、俺の名前で取り置きしてあるチケットを受け取り、席に座って麻弥さんたちが来るのを待つ。待つまでの間、持って

きたペンライト（紗夜のイメージカラーのやつ）を取り出して腰にセットしたり、ｄｕｂのライブハウス内の決まり事のようなものが記された資料を読み漁る。
「さてさて…始まるまで暇だな。にしても流石Ｒｏｓｅｌｉａの人気ハンパねーな…」
　プロ顔負けの本格ガールズバンドＲｏｓｅｌｉａ、その人気はＢＬＡＣＫＳＨＯＵＴをリリースした当時からずっとうなぎ登りだ。孤高の歌姫と呼ばれていた友希那がバンドを組んだってのが話題になってたからなぁ…
「そろそろ麻弥さんと日菜さん来る頃だろうな…」
「おっ待たせ和都くーん！」
「お待たせしました」
　ちょうどよく日菜さんと麻弥さんが到着して俺の隣に座る。日菜さんの手には俺と同じ紗夜のイメージカラーのペンライトが握られていた。
「早くおねーちゃん来ないかなー♪」
「そんな急かさなくても紗夜は逃げたりしないと思い…たい」
「そこは逃げないって言って和都くん！」
「お２人共、そろそろ始まりますよー？」
　麻弥さんがそう言うとライブハウス内が一瞬暗くなる。そして再び明かりが灯されるとステージに友希那達が立っていた。それを目の当たりにしたファンのやつらは大歓声をあげる。もちろん日菜さんも…
「おねーちゃーん!!おねーちゃんおねーちゃん!!」
　この通り、紗夜を見て大歓喜していた。
『Ｒｏｓｅｌｉａです。みんな、今日はｄｕｂまで足を運んでくれてありがとう』
　友希那がスタンドマイクから音声を通す。それだけで更に歓声があがる。
『みんな…Ｒｏｓｅｌｉａに全てを賭ける覚悟はあるかしら？早速新曲、行くわよ！ＢＲＡＶＥＪＥＷＥＬ!!』

これが昨日リサと話していた新曲か…Ａメロを聴いただけで分かる力強さと繊細さ、そしてリズムも完璧だ。そして友希那の圧倒的な声量と歌詞のフレーズ一つ一つがライブハウスを包み込む。俺や麻弥さんが圧倒されながら魅入ってると横では、

「おねーちゃーん!!めっちゃかっこいいよー!!大好きだよー!!」

息を荒くしながらペンライトを他の客と同じように振りまくり、どさくさ紛れに愛の告白までしていたが当然紗夜は集中していた為、顔色ひとつ変えていない。因みに日菜さんの興奮のボルテージは家に帰ってからも収まらなかったと後日疲れきった紗夜から聞くことになるのは今の俺はまだ知る由もないのだ。

この後ＢＬＡＣＫＳＨＯＵＴとＬＯＵＤＥＲや、カバー楽曲のオンパレード、ＲＥ：ｂｉｒｔｈ　ｄｙ等も披露しライブは終わった。ライブが終わり麻弥さんは興奮しまくった日菜さんを連れて一旦事務所に向かった。ちょっと打ち合わせ入ったので失礼します、との事だ。俺も帰ろうとしたが、紗夜からＬＩＮＥが来た。

「あり？紗夜からだ」

なんだと思い見てみると画像が添付されていた。開くとそこには友希那以外が死屍累々と控え室でぐったりとしていてヘルプと一言記されていた。スタッフの人に事情を話して控え室の扉を開けるとクタクタになった紗夜が俺を見るなりフラーっとしながら抱きついてきた。

「わとぉ…つかれましたぁ…」

「おうっふ…いきなり抱きついてくるなって紗夜…」

「だって疲れたんですもん…少しくらい優しくしてくださいぃ…」

「ったく…じゃーねーなぁ…」

「ワト～…」

今度はソファでぐったりしているリサが俺を呼ぶ。紗夜に抱きつかれながらもリサの所に行く。

「なんでお前まで瀕死寸前なんだよ…まぁあれだけやりゃあそうなるよな…」

「あ、あはは…ちょっと飲み物買ってきて欲しいんだけど…」

「お、お願いします華宮くん…」
「ぐふぅ…お願いしますぅ」
　リサの手にはメンバー５人分のお金、飲料が５本買えるほどのお金が握られていた。一旦紗夜を引き離し、リサからお金を受け取った俺は外の自販機に向かう。そこには風邪を浴びて涼んでいる友希那がいた。
「あら和都、どうしたの？」
「お前こそこんな所で何してんだよ」
「見ての通り、みんなが来るまで外の風邪を浴びて涼んでいたのよ」
　荷物を持ちながら平然と言う友希那だが全く疲れてない、とは言えないだろう。俺は自販機で５人分の飲み物を買い、１本を友希那に渡す。
「あら、私にくれるの？」
「この５本はリサの金だ。後でリサにお礼でも言っとくんだな」
　俺は残りの４本を紗夜達に渡して控え室に戻った。飲み物を受け取ると紗夜もリサも燐子さんもあこも喉をごくごく鳴らして飲んでいく。
「ぷっはぁ！生き返ったぁー！華宮先輩ありがとうございます！」
「ふぅ…死ぬかと、思った…どうも…華宮くん…」
「燐子さんもあこも例ならリサに言ってください」
　リサと紗夜も元気を取り戻したのか楽器を背負って帰る支度を始める。俺はそれを見送り控え室を後にし、ｄｕｂを出る。
「さーて俺も帰るｋ…」
「Ｗｈｙ!?どうしてなのっ!?」
　突然、聞き覚えのある声が聞こえた。声のした方に行ってみるとそこには友希那と猫耳ヘッドフォンを付けたチュチュが対峙していた。俺は２人に見つからないようにこっそり聞き耳を立てることにする。

友希那ｓｉｄｅ

「何故？どうして？Ｒｏｓｅｌｉａが私の音楽を奏でれば最強最高の

バンドになれる!!」
「…悪いけどＲｏｓｅｌｉａにプロデューサーは必要ないわ。私達は私達の音楽で頂点を目指してるの。ごっこ遊びならアイ〇スでもスクフ〇スでもやってればいいわ」
「ご、ごっこ遊びじゃないわ！私は真剣なの!!ってかその２つ名前的に大丈夫なの!?アウトにならないの!?」
　和都が居なくなった直後、目の前に現れた猫耳ヘッドフォンの子が来た。話を聞く限りだと音楽プロデューサーをやっていて、名前はチュチュと言うらしい。その中で私達Ｒｏｓｅｌｉａを是非ともプロデュースさせて欲しいと頼み込んで来たのだけれど…
「あれほどのＰｅｒｆｅｃｔｓｏｕｎｄ!!ギターやベースのＴｅｃｈｎｉｑｕｅ!!ドラムとキーボードの織り成すＨａｒｍｏｎｙ!!そこにこの私のプロデュース力とデータ、私の創る曲が加われば何者にも勝る最強のバンドになれる!!勿体ないわよ…貴女達の才能を私なら完璧に活かせる！だ、だから…」
「友希那お待たせーって…どうしたの？」
　後ろの勝手口からリサ達が出てくる。
「あれ？もしかして友希那取り込み中だったり？アタシら１回退いとこうか？」
「大丈夫、なんでもないわリサ。話は終わってるから行きましょう」
「ちょ…待ちなさい湊友希那っ!!」
　行こうとすると、再び呼び止められ何かを渡された。渡されたものを見てみると猫の形をしたＵＳＢメモリだった。
「私の最強の音楽…聴けば分かる!!」
　私はため息混じりに言い放つ。
「…何度言っても、例えこの曲を聴いたとしても結果も答えも変わらないわよ？」
　私達はその子を後にして立ち去った。

和都ｓｉｄｅ

チュチュがどうやら断られたらしい。まぁ当然の結果だよな…さて俺は撤収するかｎ
「和都、そこで何をしてるの？」
「おうわっ!?」
声を掛けられ振り向くと友希那達が居た。俺は盗み聞きしてたことを正直に話す。隠すのはなーんか性にあわないからな。はぐらかしても逆に紗夜に問い詰められたらどの道はいちゃうだろうし。
「聞いてたのね…盗み聞きなんて褒められたことじゃないわよ」
「帰ろうとしたら聞こえたんだよ猫バカ」
「ね、猫バカですって…？」
「ほーら、友希那もワトも睨まないの！ね？早く帰ろ？アタシもうクタクタだよ～？」
「私も帰って今日は休みを取りたいです」
「紗夜がそう言うなら…」
仕方無くやめて俺達は帰路を歩いて帰って行った。

チュチュｓｉｄｅ

「うううう…なんでなんで信じられなーい!!」
私は近くにあったゴミ箱をドガッと思いっきり蹴り上げると中のゴミがガサガサと散布する。
「はぁはぁ…きいぃぃ！」
華宮和都と言い友希那と言いこの私の誘いを断るなんてええ～っ!!私を誰だと思ってるのよっ!?
「ぐぬぬ…」
散らかったゴミを集め、ゴミ箱を元の場所に戻す。
「…ぶっ潰してやる。華宮和都も友希那もＲｏｓｅｌｉａも!!私の音楽が凄いってことを証明してやる!!ぜーんぶ！ぶっ潰してやる!!」

紗夜ｓｉｄｅ

～氷川家　紗夜の部屋～

『うぉーい紗夜、起きてるか？』
「起きてますよ。さっきお風呂から上がって部屋に戻って来たばかりなので」
　お風呂から上がった私は和都と通話をしている。
「今日のライブ来てくれてありがとうございます」
『行くに決まってんだろ？ってか新曲の時の紗夜めっちゃカッコよかったぞ？』
「ふふ…ありがとう。かっこいいなんてあまり言われたことないからちょっと照れくさいわね…」
『じゃあ可愛いって言った方が良かったか？』
「そ、それは…2人で居る時だけです。私の前でしか言っちゃダメです／／／／／」
『お、おい…恥ずいこと言うなよ…』
「和都が言ったからでしょう…」
『……／／／／／』
「……／／／／／」
　互いに恥ずかしくなったのか無言が続く。
『そっ！そうだ紗夜！今度の日曜日空いてるか？』
　いきなりの話題に困惑しながらも予定を確認する。
「え？あ、空いてるけど…どうしたの？」
『いやぁ、えっと…学年上がってから2人で出掛ける機会って中々なかったじゃん!?』
「え、えぇ…」
『だからさ！この機会にどっか涼しいとこ行かねっ?!今日のライブ頑張ったご褒美みたいな!?』
「ご褒美かどうかは置いとくけど…そうね、確かに涼しい所に行きたいわね」
『よーっし決まりだな！ちゃんと予定空けとけよー！それと今日はゆっくり身体休めろよ!!』

和都はそう言って電話を切った。私は携帯を置いてベッドに座り、クッションをぎゅっと抱きしめる。
「…久しぶりの和都とのデート…ふふ♪」
変にニヤけるのをぐっと堪える。涼しい所…渓流とか川のある場所とかに行くんですかね？もし水に入るとかになった時もだし個人的には和都に見てもらいたいってのもあるわ…
（だとしたら、恥ずかしいけど…み、水着を買いに行った方がいいかしら…？）
そんな事を思ってると私は疲れからかそのまま眠ってしまった。